

海を渡る風

多谷昇太

湖^{うみ}ほとりたたずむ我に子犬向け縁^{えだし}たまひ
し美女にいらへあへず

光晴のランボー詩集に身を染めて遙^{とほ}けくも
来たりしものか聖地^{こゝ}へ

※ランボーの生誕地シャルルヴィルメルヴィル
にあるランボー博物館を訪いました。やっと来
たという感じです。

メルヴィルに彼の人愛されおはすなり黄色
き弟子など誰か知るらん

いずこにもありのすさびの民のゐて世知ら
ぬ冠者をかへりみもする

彼の人の船上^{ふなへ}にあらなくに酔ひどれし零落
ママンの駅前ポルカ

※パリ、オーストルリッツ駅前で泥酔した御婦人
が彫像の台に上り踊っていた。ワインをラッパ
飲みしながら。

ロマの血の本懐なりき我はこの異国をさす
らふ異邦人となり

※グラナダにやつて来ました。赤茶けた、南国ム
ードの漂う町：がその印象。これこそ少年の日
に夢見たさすらいの原風景：などと感動した
りして。

ひとり来てアラブの王に遊ぶなりアルファ
ンブラよ妃もあらはれよ

※世界の三大庭園の一つ、まことに見事なもので
した。その時は私一人しかいないかのごとく空
いていて、我庭園を遊ぶアラブの王を満喫。あ
のポーチの影から妃は現れないものか：。

カルメンよしるしある身ぞ君がむた舞ひさ
せなむやなほ狂ひてんや

※背も露わな舞姫に感激。男を問うように私
を睨みつけて踊る：雌豹を見るようでした。

あなやあなやフランクフルトに置きつるぞ
ひそか夢見しあが妻なるを

※十二月某日、フランクフルト駅で赤いヤツケ姿
の日本女性と邂逅。フランスで一一緒にバイトを
と誘われたが私はスイスへと旅立ちました。止
むを得なかったのです。しかしこれほど後ろ髪
を引かれたことはありませんでした。

水頭の醜き子らの泣きをりぬ捨子なるべし
ベオグラード駅たりき

※旧ユーゴスラビア・ベオグラード駅構内、5、
6才くらいの、一人が水頭症の兄弟が身も世も
なく泣き叫んでいました。おそらく出稼ぎに来
た中東あたりの親が万策尽きて放置して行っ
たのでしょうか。恐ろしげに、また当惑しながら
市民は通り過ぎるばかり、私もその一人でしか
なかった。何が出来たでしょうか。

これはしたりペルシヤの姫の寝るなり手
には小銭が、首元にライ病班

※一年半を過してヨーロッパを旅立ったのです。
中近東経由で。途中イラン・テヘラン市内のこ
と、地下道を通った時そこにブルカを来た若い
女性が寝込んでいました。なぜ？と驚きました
が首元を見れば隠しようもない癩病班が：憐
れむ市民が差し出すように投げ出された手の
平にアラアの御慈悲を置いて行くのでした。

泣きたかりこれが星夜か月光かコラーンよ
いざなへ我は打たれたり

※アフガニスタン、ヘラート。安宿に宿泊したが
調度品も何もない、蚊が巢食う部屋に閉口して
中庭で寝ようと表に出る。出た途端「ん？昼？」
とても違うような明るさに面食らった。見上げ
れば実に満天の星！そして月明かり！シヨッ
クでした。日本の空も私の心も、どれだけ曇っ
ていたか。♪：シメーニカ、ホター：♪流れ
来るコラーンの歌声に回教徒ならずも額づき
たい思いでした。

「バクシーシー！」ライ病の少年が来バリアの幼女が来此処し魂の故郷インドなりけり

※夜、インド到着。デリー駅構内に人がいっぱい寝ている。列車待ち？…ではなかった。ホームレスの人たち。表に出てスタンドでマンガジュースを飲めば、ライ病でいざりとなった少年が寄って来て私のズボンを引く。大きなクモのようで魂消た。スタンドの兄貴に蹴とばされて追いかかれてしまった…。

ターバンのあやしき翁我を呼ばふチキチキダンスとぞ直後女を知れり

※人に連れられて女を買いに行く。二十四才だったが童貞だった。

おのづから胎に入ると引かれしか悪とせよ業とせよ回帰せし闇

ニルベラのやすらぎけふる村に来て前世を見るはただ不思議かりき

※デリー近郊アサンソールでのこと。朝餉の煙た

だよう村を去ると説明不能の不可思議な懐旧の想いがした。粗末なサリーを巻く女も遊ぶ子供も、ピツバラの木々も皆懐かしく、恋しい。帰国後その地を調べたが、何と、お釈迦様が教を説かれ遊行された地だった。この後得度したこともとも合わせ何者かの誘いを想う…。

南国のマールブルテンブルに得度すも黄金の仏像そのおそろしき眼

※衣、食、住をタダにしようと思って得度しました。剃髪し、眉毛も剃り落としてオレンジ色の僧衣を纏えば、外見だけはサモンです。しかし不純な動機と我心の実態を思えば柔和なお顔の仏像が恐ろしい限りです。

剃髪し朱色の僧衣を身にまよふ男は誰ぞ我なめり

ウガサ・ワンターミ・パンター…解さねど誓文となふる六道男

あなや、な拜みそ街に会ひつるシヤムの婦人、と経文ひとつ知らぬに

※街を歩けばよく拜まれます。特に婦人に。経文ひとつ、タイ語ひとつ判らぬ身では…。

はたやはたみ山も塵にも堪へかねていづれ苦とせば逃ぐるなめり

※僅か三ヶ月の沙門生活が持ちません。不本意極まる醜聞を買ってしまつて。修業の厳しさ云々ではありませんでした。

住職は日泰の間の子高德と永平寺よりの僧得々と云へり

白孔雀住職背後にあそぶなり人が鳥か鳥が人か涅槃の写し絵

※みつともない男（つまり私）が還俗願いを出しに行った時、住職は寝台に横になって寛いでいました。その背後に開き放たれた大きな窓があつて白孔雀が遊んでいます。どちらかがどちらかの化身と見えたことでした。



報恩にまさる行なしそれ為せと言魂がむた云ふが尊さ

※「御両親はお元気ですか？」と尋ねられる。勝手極まる洋行、その他親不孝すべてを見通していらつしやるが如し。仏教の行の第一は報恩と力強く云われる、その言魂が痛い…。

サマネイゆ先へすすめと人の云ふ今還俗するに何の心ぞ

※お詫びして退室する時一言そう云われました。僧俗ともに人の道と云うがごとし。ならば、早くサマネイ（見習い）を脱して一人立ちせねばなりません…。